



Title	堀田善衛 『時間』 : 乱世を描く試み
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 154, 1 (右) -31 (右)
Issue Date	2018-03-23
DOI	10.14943/bgsl.154.r1
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/68682">http://hdl.handle.net/2115/68682</a>
Type	bulletin (article)
File Information	154_03_mizutamari.pdf



[Instructions for use](#)

## 堀田善衛 『時間』

— 乱世を描く試み

水 溜 真由美

## 一 はじめに

堀田善衛の長編小説『時間』（新潮社、一九五五年<sup>①</sup>）は、南京事件（南京大虐殺）を描いた稀有な作品である。『時間』の例外性は、加害国側の作家である堀田善衛がこの大事件を正面から描くに留まらず、被害国側の中国人の知識人を主人公に据えている点にある。<sup>②</sup> 辺見庸は最近復刊された同書の「解説」の中で、この点を次のように論じている。

だれもが最初におどろくのは、主人公の「わたし」が陳英諦という名の中国人インテリであることだろう。

Nanking Atrocities や Nanking Massacre については The Rape of Nanking などという最大級の悪名で世界中につ

堀田善衛『時間』

たえられ、「人間の想像力の限界が試される事件」（イアン・ブルマ『戦争の記憶』ちくま学芸文庫）とまでいわれる大虐殺事件を、第三者でも加害側でもなく、もしも被害側の目でみたなら、どんな光景がたちあがるか。加害側のたちいふるまいは中国人の目にはどううつったのか——という、どこまでも黯然として重苦しいテーマを、加害国ニッポンの作家、堀田善衛がひきうけ、みずからが塑像した中国人・陳英諦に仮託するかたちで、惨劇を活写し、ひとはここまで獣性をあらわにできうるものか、ニッポンジンとはなにか、歴史とはなにか——を縦横に思索させたのである。<sup>③</sup>

『時間』は、南京事件の渦中にあつた中国人知識人陳英諦の日記として書かれているが、陳だけでなく、本作品の主要登場人物は、桐野中尉（大尉）と部下を除いて全て中国人である。辺見が指摘するように、このような設定は日本軍が犯した残虐行為を中国人の視点から捉え直す意味がある。

中国人の視点から南京事件の追体験を試みること——多くの読者は、その最大の狙いを中国における日本軍の蛮行を批判することにあると考えることだろう。堀田と中国との関わりも、そのような想定を裏付けるかに見える。周知のように、堀田は一九四五年三月末から四七年初めまで上海に滞在した。後に堀田は、戦争末期の上海において日本兵が中国人の花嫁を辱める場面に遭遇し、その日本兵に「つかかり、撲り倒され蹴りつけられ、頬骨をいやといふほどコンクリートにうちつけられた」体験を、自身にとって「一つの出発点」であつたと述懐している（第九卷一七四―一七五頁）。堀田は、デビュー後間もない一九四〇年代末から五〇年代にかけて上海を舞台とした作品を多数発表しているが、これらの作品の底流にも、日本の中国侵略の歴史に向き合おうとする真摯な姿勢が認められる。

しかし、『時間』に関する限り、日本の中国侵略や日本軍の残虐行為に対する批判は、少なくとも作品の主眼であるとは思われない。同書において、堀田の関心は乱世的状況における中国人の身の処し方、中でも知識人であるところの陳英諦のそれに向けられている。英諦の日記の体裁をとる『時間』において、堀田は乱世を生きる知識人の内面に入り込み、一体化する。筆者はこれまで、『広場の孤独』、『海鳴りの底から』、『方丈記私記』、『定家明月記私抄』、『ゴヤ』、『ミシェル 城館の人』などの作品を論じ、堀田が乱世における知識人の身の処し方に強い関心を向けていることを明らかにしてきたが、『時間』もその例外ではない。

堀田は『時間』執筆中に行われた講演「私の創作体験」<sup>(6)</sup>の中で、『時間』が思考実験的な作品であることを告白している。この講演において、堀田は『時間』のねらいについて、「現代」という時代が課す条件の中で生きる人間を考へること、「いわばもつとも現実的で、同時に極度に抽象された舞台における思考の訓練」であると説明している（第一三卷一三九頁）。このことと関連して、堀田の創作ノート『夜の森 時間』<sup>(7)</sup>には、「この作物の主人公陳英諦はわたしの「Jest氏である」という記述も見られる。

右の講演において、堀田がポール・ヴァレリーの『テスト氏』のみならず、アルベール・カミュの『ペスト』に言及している点も示唆的である。周知のように、『ペスト』はフランスの植民地であるアルジェリアのオランを舞台としてペストに対する市民の闘いを描いた小説であるが、この作品に描かれるペストは戦争のアレゴリーであることが知られている。三野博司は、『『ペスト』が提示しているのは、平時ではなく戦時のモラルである。人類が巨大な災禍と闘うとき、どのようなモラルが可能なのか、その思考実験の作品であるということもできる』<sup>(8)</sup>と論じている。なお、カミュは『ペスト』のエピグラフとして、「ある種の監禁状態を他のある種のもので表現することは、何であれ

実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、理になかったことである」というデフォーの一節を掲げているが、この一節は、カミュが戦争がもたらす「監禁状態」をペストがもたらす「監禁状態」を用いて表現したことを示唆するものである。

以上の点をふまえつつ、本稿では、『時間』が乱世的状況におかれた人間の身の処し方をどのように描いているのかを詳しく検討する。第二節では、『時間』の梗概を確認すると共に主要登場人物について概観し、堀田が乱世的状況における登場人物の身の処し方を周到に描き分けていることを示す。第三節では、主人公の陳英諦に注目し、宿命論に對する抵抗が英諦にとって重要な賭け金になっていることを示す。第四節では、「何者であるか」という問いとの関わりにおいて、英諦がスパイとして設定されていることの意味について考える。第五節では、桐野中尉（大尉）に對する英諦の抵抗について、ヴェルコール『海の沈黙』の影響関係をふまえつつ検討する。第六節では、『時間』とほぼ同時期に執筆された『夜の森』と『時間』の関係について論じる。

## 二 乱世における様々な身の処し方

まずは、『時間』の梗概を確認したい。

『時間』は南京の洋館に暮らす陳英諦の日記として書かれている。英諦の日記は一九三七年一月三〇日から始まり一二月一日を最後に中断された後、一九三八年五月一〇日より再開され一〇月三日で終わる。約半年間日記が中断された理由は、虐殺事件に巻き込まれた英諦が自宅を離れることを余儀なくされたためである。ただし、虐殺事

件については再開後の日記の中で詳しく語られる。

陳英諦は、国民政府海軍部の官吏であり国民政府のスパイでもある。英諦は、日本軍の南京入城が迫り国民政府が漢口に移転した後も、妊娠中の妻莫愁と五歳の息子英武と共に南京に留まる。その最大の理由は、同居していた司法官の兄英昌から、南京に留まり家財を守るよう命じられたためである。

物語は、英諦が南京を去る兄とその家族を見送る場面から始まる。その数日後、従妹の楊嬢が日本軍に占領された蘇州から南京に逃れてくる。他方で、南京には、市政府の衛生部に勤務する伯父とその家族も暮らしている。

日本軍の南京入城後、英諦、莫愁、英武、楊嬢は馬羣小学校に連行される。やがて日本兵の蛮行が始まり、混乱の中で四人は安全地帯である金陵大学に逃れる。しかし、まもなく金陵大学にも日本兵が乱入し、英諦は連行される。九死に一生を得た英諦は日本軍の軍夫として使役され、逃亡後五ヶ月ぶりに帰宅する。

日本軍に接収された自宅には、日本軍の情報将校の桐野中尉（後に大尉となる）と部下が暮らしている。英諦は奴僕（「下僕兼門番兼料理人」として桐野らと同居しながら密かにスパイ活動を続ける。すでに伯父は日本の傀儡政府の衛生部に転じており、日本軍の特務機関が関与する麻薬の取り引きにも手を染めている。スパイ活動を再開した英諦は、古い友人でもあるスパイKと再会する。英諦はKが日本軍の特務機関に出入りし、傀儡政府の秘書室に勤める莫愁似の「灰色の服の女」と恋愛関係にあることを知る。他方で、英諦は虐殺事件の直前に逃亡した召使いの洪嫻に再会し、息子の英武の死と遺体の埋葬場所を知らされる。

やがて英諦は、共産党員の刃物屋から、楊嬢が日本軍の兵士に強姦され、妊娠し、流産したうえ、黴毒と麻薬中毒を患っていること、妻の莫愁が英諦の連行後に金陵大学で死亡したことを知らされる。英諦は、桐野の許可を得て楊

嬢を自宅に引き取り療養させるが、楊嬢は麻薬の禁断症状から自殺未遂を図る。その直後、英諦は伯母の来訪を受け、金を渡され、楊嬢を上海の「ドイツ人の病院」に入院させるよう勧められる。だが、楊嬢は上海に行くことを拒み、「こんな身体にされたその現場でよみがえりたい」として、南京の金陵大学病院に入院したいと述べる。

右の梗概から明らかのように、中国人の主要登場人物である陳英諦、陳英昌、伯父、楊嬢、刃物屋、K、「灰色の服の女」は、日本軍の南京入城から占領にいたる危機的状況の中で多様な生き方を選ぶ。英諦は、各々の生き方に強い関心を払い、論評を加える。以下では、各々の登場人物の身の処し方について概観する。

まず陳英諦について。本作品の語り手である英諦は、日本軍の南京入城以後の乱世的状況に身を曝し、乱世の現実を見定め、これを日記に記録する。この点において英諦は、随筆や絵画によって乱世の生々しい現実を記録した鴨長明やゴヤと近い立場にある。同時に英諦は、日本軍の南京占領を非とし、奴隷の境遇に身を置きつつ日本軍に対する抵抗の姿勢を維持する。英諦は桐野との融和を拒む一方、自宅地下室の無電機を使ってスパイ活動を続ける。

陳英昌について。司法官の英昌は政府の漢口移転を機に南京を去る一方、弟英諦には家財を守るため南京に留まるよう命じる。保身的で身勝手な人物である。英諦は兄の態度に批判を抱くが、その批判は、危機的状況において易々と人民を見捨てる支配者や国家体制に対する批判に重ねられている。<sup>(10)</sup>

伯父について。伯父は、終始南京に留まりながら巧みに身を処し、日本軍の南京入城から占領に至る混乱を乗り切る。伯父は虐殺事件の発生時、国際安全地帯委員会に所属し身の安全を確保する（後に刃物屋の証言により、伯父は金陵大学から連行される英諦を黙殺していたことが明かされる）。日本軍の南京占領後は、傀儡政府の衛生部に転じ、やがて桐野が関与する特務機関と通じて阿片の取り引きに手を染める。伯父はエゴイストの機会主義者であり、乱世

に乗じて私服を肥やす『広場の孤独』（中央公論社、一九五一年）のティルピッツ男爵や『祖国喪失』（文芸春秋社、一九五二年）のゲルハルトに近い人物として造型されている。前掲の創作ノート『夜の森 時間』には、「伯父こそ nihilisme である」という記述が見られる。

楊嬢について。楊嬢は、日本兵に強姦され心身に大きな傷を負いながらも南京事件を生き延び、最終的に生きる希望を取り戻す。英諦は、思慮と勇気を兼ね備えた楊嬢を、「新しい精神」を持つ「新しい世代」として好意的に描いている。英諦は、楊嬢が的確な状況判断の上で蘇州を脱出したこと、馬羣小学校でいち早く難民の組織化に着手したことを賞賛する。また物語の末尾では、金陵大学に入院し「苦しみのその只中で癒え」ようとする楊の決意に「内発的」な闘いの姿勢を認めている。

刃物屋について。日本軍の軍夫として英諦と苦難を共にした刃物屋は、英諦の南京帰還後、刃物の行商人として英諦の邸を訪問する。この時、英諦は刃物屋が抗日運動にコミットする共産党員であることを察知する。英諦は党派の違いを越えて、若い刃物屋の勇気と行動力に敬意を払う。またこの点において、英諦の刃物屋に対する視線は楊嬢に対する視線とも重なっている。

Kについて。Kは、一九二〇年代に英諦と共に革命運動にコミットした過去を持つ画家であるが、国民党のスパイ活動を通じて英諦と再会する。英諦は、日本軍の特務機関に出入りするKを二重スパイではないかと疑っている。

「灰色の服の女」について。「灰色の服の女」は国民政府の官吏の妻であるが、「家財保全」のため夫の漢口移転後も南京に留まり、傀儡政府の秘書室に勤務している。「灰色の服の女」は最後まで謎の残る人物だが、スパイであることが示唆されている。



ところで、右の述べた七名の登場人物のうち、英諦、K、「灰色の服の女」はスパイもしくは二重スパイである。伯父のような機会主義者・ニヒリストと同様に、スパイもまた堀田の作品に頻出する人物類型である。前掲拙稿「堀田善衛『広場の孤独』論」で詳しく論じたように、茅盾『腐蚀』を下敷きにして書かれた小説「歯車」には、国民党の特務機関のスパイ陳秋瑾と共産党のスパイ魏克典が登場する（陳秋瑾は共産党員の元恋人黄を救うため、二重スパイとなる）。堀田がスパイに強い関心を示した理由の一つは、評論「鹿地事件における小説的解釈」<sup>①</sup>の中で述べられているように、スパイが、敵か味方かを峻別する「政治」にとって不可欠の手段であったことによる。堀田はスパイの心理にも強い関心を示したが、この点については第四節で検討する。

### 三 二つの宿命論

先述したように、英諦は、刃物屋と楊嬢を勇氣ある抵抗者として捉えている。それでは、国民政府のスパイとして抗日運動に関与する英諦も、刃物屋や楊嬢と同じタイプの人物として位置づけられているのだろうか。この点について、英諦自身は、両者と自身を差異化している。英諦は、「研ぎ了えた庖丁を手にもち、ためつすがめつ眺め入」る刃物屋を見ながら、次のような考えに捕らわれる。

わたしは、どうやら何者かで在る、うとし、

楊をはじめとして、彼らは、何事かを為そう、としているのであるらしい。

わたしは、つねにいかなる者で在るべきかを主にして考え、(存在)

彼らは、与えられた時と場に於て、何を為すべきか、を考える。(行為、そして組織)。(第二卷三七三頁、傍点堀田)

右の引用において、英諦は、自身を「何事かを為」すことよりも、「何者かで在」ることを「主にして考え」る人間として位置づけている。その理由の一端は、おそらく英諦が一九二七年の反革命クーデターにより革命運動に挫折した経験を持ち、かつ中年に近い年齢に達していることと関わるだろう。英諦は、もはや行動に純粋な情熱を傾ける若い世代には属していない。

しかし、英諦が日本軍の南京占領下における身の処し方として、「何者かで在」ることに力点をおく理由は、そうした消極的な要因のみに由来するわけではなからう。先述の創作ノート『夜の森 時間』の表紙には、「われわれにとつて「革命」とは何であるか?これがこの両書の根本視点である」とする記述がある。この記述は、主人公である英諦の観点が「革命」性をはらんでいることを示唆している。

ここで、英諦のおかれた状況について考えてみたい。日本軍占領下の南京では、中国人が日本軍に抵抗する可能性は著しく制限されていたと考えられる。さらに日本軍の南京入城時には、非武装の市民にとつて抵抗の可能性はほぼ皆無であったと言ってよく、難を逃れるためには、英昌のように逃亡するか、伯父のように特権を利用するほかなかった。そして英諦はこのいずれの道も採らず、家族もろとも日本軍の蛮行の犠牲となった。

一般に、行動の可能性の欠如は人間を内向させる。英諦が日本軍占領下の南京において、深夜の地下室で日記を綴

り自己と対話を続けることも、自由を奪われた英諦の内向を示す。しかし、英諦において内面への沈潜は、外界に対する受け身の態度を帰結しない。英諦は日本軍の南京入城直前に当たる二月九日の日記に、絶望的な状況の発生を予期しながら次のように書き留める。

砲火、死、占領、亡国、属国、殖民地。

奴隷の境遇にあつて、いかにして奴隷ならざる、奴隷から最も遠い精神を立てて生きてゆくか（第二卷二九一頁、傍点堀田）。

ところで、右の引用中文に「奴隷から最も遠い精神」とあるが、それはどのような精神なのだろうか。

英諦は、「奴隷的境遇」におかれた人々が宿命論に陥る傾向を持つことを繰り返し批判している。というのも、宿命論は現状を容認させ、現状に対する抵抗を放棄させるからである。たとえば英諦は、日本軍の南京入城直前の一九三七年二月六日の日記において、「伯父の如きは、完全に日軍入城後の暴行を期待していると云えると思う。それは心理的に、既に既成事実だ……」（第二卷二八三頁）と綴っている。また翌三八年八月五日の日記には、伯父とのやりとりをめぐる次のような記述がある。

「日本は勝つちまつたじゃないか。秋になりや、漢口も陥ちるよ」  
「……」

彼は漢口の陥ちることを望んでいる。日本は勝ったじゃないか、と云って、彼は誰にもわからぬ未来、各人の意志によるしかない未来を不断に過去化しようとしている、まだ陥ちもしない漢口をすら、早く過去のことにしてたくて仕方がない。わたしは彼を苛立たさぬよう慎重になる。

「日本は強い、仕方がないことだが。現実的にならなきゃいかんよ。事実が問題なんだ、事実が」  
(中略)

「誰しも平和に暮したいには変りはないだろうが」

平和主義者が敵国の戦力を頼りにする。事実を認めろ、と云う。私も事実を認めるにやぶさかではない。だが、わたしにとって事実を認めるとは、既成事実をより一層かためるために協力することではない。その事実を変えようと意志することだ(第二卷三五六頁)。

前節で確認したように、伯父はエゴイストの機会主義者であり、私利私欲のため日本軍による中国侵略を最大限に利用する。権力者に取り入ることが習性となった伯父にとって、状況は自ら作り出すものではなく所与のものであらねばならない。

他方で英諦は、破局的な状況のただ中で自然や風景を審美的に捉える態度——川端康成や芥川龍之介が「末期の眼」として論じたことで知られる——にも、一種の宿命論を見出す。英諦は、日本軍の南京入城前日の一二月一〇日の日記の中で、息子の英武がもみじの枯葉を拾い上げて「お父さん、きれいだねえ」と述べたことに触発されて「末期の眼」をめぐる考察を行う。英諦は、「自然は、自然美は意志された美ではない。自然は非意志的なものであり、言い換

えれば絶望的なものである。死はこの自然の律法に従うことを意味する、この絶望的な律法に従うときに美が見えてくるとすれば……」（第二巻二九七頁）として、破局的な状況におかれた者が意志を放棄し自然の美に身を委ねることに、誘惑を感じながら、強い反発を示す。

前掲拙稿「堀田善衛における作家・芸術家の肖像（1）——西行」の中で指摘したように、堀田は戦時中から、日本の伝統的な美意識に連なる「末期の眼」に批判を抱いていた。評論「恐怖について」<sup>12</sup>では、戦時中に「末期の眼」が戦争を宿命論的に受け入れさせる役割を果たしたことを、「戦時中、戦争に出て殺される、殺すという問題を、最終的に解決してくれたものが、結局はあの『末期の眼』論であったこと、あそこに一切を解決というよりも、人間と歴史に対する責任の念を解消するという、そういう点に辿りついたことを私は恐怖をもって思い出す」（第一四卷八二—八三頁）と述懐している。<sup>13</sup>

ところで、これら二つのタイプの宿命論は、いずれも「奴隷」が「奴隷の境遇」を主体的に受け入れる点で「奴隷的な精神」を意味する。他方で、「奴隷から最も遠い精神」を志向する英諦は、現状を拒否し宿命論を退ける。英諦が、「非意志的」な「自然物」のアンチテーゼとして、「人工になる物」を対置するのも、そうした精神の表れである。英諦は日本軍の南京入城直後の二月二日午後、「破壊され倒壊された小さな廟の庭」に一基の鼎を見出し、これを抵抗の拠り所と見なす。

木の葉のように吹きまくられたり、水鳥やベンチの黄葉の美に（略）魅入られたりするのはなく、わたしはあの熊にも似た黒い鼎のように存在したいのだ。静かに、しかし内面的には鼎に油の湧くが如きものでありたい

のだ(第二卷三一九頁)。

人工になる物はすべてはかないという妄念は葬らるべきだ。黒い鼎一箇は、紫金山と優に相對しうる(第二卷三〇七頁)。

同時に英諦は、絶望的な状況のただ中で、希望を持つことの意味を強調する。英諦は、スパイの世界における恋愛の「道具化」を嘆くKに対して、「うむ。だけど恋愛だけではなしに、束の間の閃光も薄光りも、とどのつまりは意志し希望しなければ、無いよ。(略) 知ることよりも怖れることよりも、欲することの方が大事だよ。でなければ、何も彼もあやふやな夢におわる」(第二卷四二二頁)と説いている。

未来に希望を持つことは、現状を拒否し、現状を変える可能性にコミットすることと同義である。しかし、絶望的な状況の下にある人間は、ペシミズムやニヒリズムに傾斜しがちであり、容易に希望を持ち得ない。創作ノート『夜の森 時間』には、「Espoir (希望)」と題したフランス語のエッセイが書かれているが、このエッセイは、「Nous sommes dans le nihilisme. Peut-on sortir du nihilisme? C'est la question qu'on nous inflige (我々はニヒリズムの中にある。ニヒリズムから逃れることは可能か。それこそが我々に課せられた問題である)<sup>(14)</sup>」とする一節で始まる<sup>(15)</sup>。

同様に、「口にごそ云わぬが、毎時毎分、わたしは黒々としたニヒリズムと無限定な希望とのあいだを、往復去来していることになろう」(第二卷三七二頁)とする一節が示すように、英諦自身もニヒリズムから自由であるわけではない。とはいえ、英諦は、「希望の方は、希望する義務があると確信するから、だから漸くにして持ち得ているのである。

(略)希望は、ニヒリズムと同じほどに、担うに重い荷物なのだ。われわれは死ぬまでこの荷物を担ってゆく義務がある、とそう思っているのだ(同)として、自らに「希望する義務」を課す。

#### 四 スパイとしての生

前節の冒頭で指摘したとおり、英諦は乱世に対する向き合い方として、「何をなすか」ということよりも、「何者であるか」ということに重点をおいていた。他方で、英諦は宿命論を戒め、絶望的な状況のただ中で「希望する義務」を説いていた。つまり、英諦にとつての「あるべき自己」とは、状況を変え得るものとして捉え、未来に可能性を見出す態度とほぼ同義である。もともと、状況を変え得ると信じるからこそ何をなすべきかが問題になり得るという意味では、通常、「何者であるか」という問いと「何をなすか」という問いは連続的であろう。

しかし、両者が不連続な場合もある。たとえば、行動の選択肢が存在しないか著しく制限されているにもかかわらず、状況が好転する可能性を信じ続けるような場合である。あるいは、状況に働きかけようとする意思を持つにもかかわらず、何らかの事情で、それを外面的な行動にストレートに表現できないような場合である。英諦のケースは、これらの両方に関係するが、その背景として、外国軍の占領下におかれていることに加えて、スパイであることを指摘することができる。以下では、主として後者について詳しく検討する。

一般に、スパイは自己を偽って敵に接近し、敵から情報を引き出す。つまり、スパイにおいては、「他者にとつての自己」と「真の自己」とが鋭く分裂する。しかも、しばしばスパイは敵を欺くために味方をも欺く必要があり、その

ことがスパイを極度の孤独に陥れる。

以下では、その典型的な事例として、濟州島四三事件を描いた金石範「鴉の死」<sup>16</sup>を取り上げてみたい。この作品の主人公<sup>ジョンキジュン</sup>基俊は通訳として濟州米軍政庁に勤めながらパルチザン活動に従事している。つまり、基俊はパルチザン側のスパイなのだが、幼馴染みでパルチザン組織の幹部である張龍石<sup>ジャンヨンソク</sup>の他に基俊がスパイであることを知る者はなく、基俊は米軍の手先として住民から白眼視されている。基俊は、パルチザンの「公開死刑」の視察のため収容所を訪れた際、処刑を目前にした龍石の父親から罵詈雑言を浴びせられ、また元恋人の龍石の妹亮順から「氷のような目」を向けられる。

この悲劇的な立場はスパイの宿命といつてよい。後述するフランスのレジスタンス小説『海の沈黙』の著者ヴェルコールは、『沈黙のたたかい——フランス・レジスタンスの記録』（森乾訳、新評論、一九九二年）の中で、ドイツ占領下のフランスにおいて、対独協力者と見なされ周囲から白眼視されていた人物が、逮捕・処刑後にレジスタンスの闘士であったことが明らかにされたケースをいくつも紹介している。

もちろん、英諺の場合は日本軍に協力するふりをしてはいるわけではなく、抗日運動に共鳴する刃物屋や楊嬢との間には微かな連帯感情も存在する。けれども、英諺の場合も、「他者にとつての自己」と「真の自己」の間には大きな隔りがある。英諺がスパイであることを知る者は、スパイ仲間であるKを除けばほぼ皆無である。

ところで、『時間』において「鴉の死」の丁基俊と近い立場にある人物は、Kである。先述したように、Kは国民党のスパイでありながら日本軍の特務機関に出入りしており（ただし、その目的は明らかにされない）、スパイ仲間の英諺から二重スパイの疑惑を持たれている。しかし、Kはこの疑惑を否定する。Kは英諺に対して、「桐野大尉の謀略事



務所へ出入りする、けれどもそのおれの行動が二心あるものではないと証明してくれるものは、同じ桐野大尉の私宅のボーイをしている君、君だけなんだからね」（第二巻三九二―三九三頁）と語りかける。

ただし、『時間』は専ら英諦の視点から書かれているため、Kの真意は明確ではない。また、たとえKが本心を述べているとしても、今後もKが心変わりをしない保証はない。ただし、可能性のレベルで考えるならば、英諦についても同じことが言える。英諦は、現時点では同居する桐野の情報を盗む立場にあるが、将来、桐野に情報提供する立場に転じる可能性がないとはいえない。英諦は、自分が「桐野中尉がもっとも知りたがっている大後方地区と中国共産軍の開放地区の様子」（第二巻三三三頁）をよく知っていると日記に綴っている。

これらの事例から明らかなように、スパイは、自己を偽って敵に接近し敵を籠絡するが、その反面、敵に籠絡される危険に曝されてもいる。スパイがスパイの任務を忠実に果たし得るか否かは、スパイの忠誠心にかかっている。そしてスパイが特定の党なり国家なり大義なりに忠実であり続けるためには、「他者にとつての自己」と「真の自己」の分裂がもたらす孤独に耐えねばならない。したがって、スパイが身の証を立てるべき相手は、誰よりもまず自分自身である。英諦はKに対して、「人間になるつてことは、愛国家や政治家たちが云うほどに、やさしくはない。自分自身との戦い、抵抗がはじまるまでは、愛国も何も、やさしいこつたよ。怖れたり、怒ったり、殴ったり殺したりするぶんには、何も思想や統一のある意志なんかいりはない」（第二巻二八一頁）と述べている。

また、スパイは、敵の目をくらます演技の中で自己を見失う危険にも晒されている。英諦と同じくスパイであるKが「抽象が抽象を食らいつく」すような政治の解毒剤として、深夜にリアリズムの絵画を描くのも、おそらくこの点と関わる。Kにとってリアリズムの絵画は、英諦が深夜に綴る日記と似た意味を持っている。

ところで、敵国の占領下におかれた者の状況は、本質的にスパイの状況に似ている。彼または彼女が表面的に敵に服従しながら内心において占領を拒否するとすれば、「敵にとつての自己」と「真の自己」の間には鋭い分裂が生じざるを得ない。このことを、英諦は次のように考察している。

わたしと「わたし」——被征服、被占領地や殖民地の、または被圧迫階級の人民は、どうやら放っておけば、必然的に分裂的性格をもたざるをえないようである（第二卷三二二頁、傍点堀田）。

この引用の直前において、英諦は、「わたしは、他の誰も知らないわたしの任務についているとき、すなわち、深夜地下室に下りて無電機の前にたつたひとりで坐るとき、そのときだけわたしは「わたし」である」（第二卷三二〇—三二二頁、傍点堀田）とも述べている。つまり、英諦にとつてスパイの任務を果たすことは、日本軍の占領を拒否することと等しい意味を持つ。それゆえ、スパイ活動を行う英諦は、日本軍の占領下に身をおきながら解放に希望を託す全ての中国人の立場を体現している。

## 五 沈黙による抵抗

これまで見てきたように、英諦の日本軍に対する抵抗は、スパイ活動を通じて人知れず行われている。スパイ仲間を除けば、英諦が自宅の地下室に無電機を持ち、深夜に国民政府と交信していることを知る者はほぼ皆無であ

る。他方で、英諦は同居する桐野中尉（大尉）に対して抵抗の意思表示を行う。

第二節で指摘したように、英諦は南京の自宅に戻った後に桐野の奴僕（しもべ）となる。けれども桐野は、英諦が知識人であることを知った後、突然態度を転換する。英諦に対して英語で「Mr. Chen」と呼びかけ、召使の仕事をやめて三階の自室に戻るよう懇願するのである。

作中において、桐野は、「O・ラティモアやG・クラーク、R・H・トゥネイ、J・B・コンドリフらのなどの中国研究書を読み研究する」（第二卷三五三頁）、元大学教授として設定されている。英諦は桐野が態度を転換した理由について、「家のなかに話し相手となりうる一人の知識人を発見して、怖れと悦びの二つの感情を経験」（同）したためではないかと推測する。

他方で、英諦は「わたしは兄から奴僕となつて家財を守れと云われ、わたしもそれを望んでいるのですから、あなたの意向や好意の如何にかかわらず、わたしは奴僕の仕事をつづけてゆきます。この家のことをもつともよく知っているのは、わたしです」（同）として、桐野の申し出を拒否する。つまり、英諦は主体的に奴隷の立場を選択する。その理由は、奴隷の立場に留まることこそが「奴隷から最も遠い精神」であると考えるためだろう。

けれども中尉は、――皮肉なことに、ほかならぬこの中尉が、わたしの頭と思想と身体とを、奴隷の位置へはっきりと還してくれた。しかもそこへ還ることによって主権をも恢復してくれた（第二卷三五四頁）。

竹内好の有名な一節にあるように、「ドレイは、自分がドレイであるという意識を拒むものだ。ドレイは自分がドレ

イでないと思うときに真のドレイである<sup>17</sup>。他国の占領下にあるにもかかわらず、日本人将校の友人であるかの如く錯覚し、奴隷でないかのように振る舞うことこそ真に奴隷的なのである。

さらに英諦は、「奴僕<sup>ボイ</sup>としての最小限度より口をきくまい。その余のことは、沈黙」(同)として、桐野に対して沈黙を貫くことを決意する。英諦にとつて沈黙は雄弁な抵抗の意思表示である。

しかし、沈黙とは、一つの言葉なのだ。何かをそれは意味する。黙ることは語ることだ。啞者は黙っているのではない(同頁)。

ところで、同居する敵国の軍人に対して沈黙を通じて抵抗を行う『時間』の設定は、先述のヴェルコール『海の沈黙』から借用されたものと推測される<sup>18</sup>。ここで『海の沈黙』のストーリーを簡単に紹介しておきたい。

舞台は、ドイツ軍占領下のフランスである。姪と二人で暮らす主人公は、ドイツ軍に自宅を接収され、ドイツ軍の将校および従卒と同居することを余儀なくされる。作曲家を名乗る将校は、フランス文化に強い憧憬を持つ礼儀正しい教養人である。将校は、毎晩居間を訪れ主人公と姪に語りかけるが、二人は沈黙を守り将校と言葉を交わそうとしない。将校は二人の沈黙に理解を示しつつも、高度な文化を持つフランスとドイツが、『美女と野獣』さながらに「結合」することを夢見る。

しかし、ドイツ軍将校の夢は無残にも打ち碎かれる。休暇中にパリを訪れた将校は、「勝利者になりきつ」た友人たちとの会話から、ナチスが、フランスをその「魂」を含めて「たたき潰」そうとしていることを思い知る。また将校

は、ドイツの占領地においてフランスの文学書・思想書の持ち込みが全面的に禁止されたことも知る。絶望した将校は、これらのことを主人公と姪に語った上で、過去六ヶ月の間に自分が話したことを忘れてほしいと頼み、地方の旅団に志願したことを告げて主人公の家を去る。

『海の沈黙』には、占領軍に対して幻想を持ち、融和的な態度をとるフランス人に対する警告が盛り込まれている。同作品は、フランスのレジスタンス運動の発展に大きな影響を与えた。

『海の沈黙』が執筆された背景と意図については、前掲『沈黙のたたかい——フランス・レジスタンスの記録』に詳しい。同書によると、ヴェルコールが『海の沈黙』を執筆したきっかけは、「敗戦フランスへの讃歌」としてのエルンスト・ユンガーの著作を読み衝撃を受けたこと、「フランス人には幻想を抱かせて惰眠をむさぼらせておけばいい」という趣旨の、あるドイツ人の発言を耳にしたことだったという。また、作中の主人公とドイツ人との関係は、ヴェルコールと彼の復員まで自宅に住んでいたドイツ人の青年将校との関係を元にして書かれている。ヴェルコールは、村で会う度に礼儀正しく挨拶するこのドイツ人の青年将校を無視し続けたという。

これらの点から、『時間』と『海の沈黙』の共通点は明らかであろう。『海の沈黙』において、隠居に近い静かな生活を送る主人公と姪はレジスタンス運動の闘士ではない。しかしながら両者は、同居するドイツ人将校に対して、消極的ながらも明確な意思表示を行う。先述したとおり、堀田が英諦に託した乱世における身の処し方とは、華々しい政治運動にコミットすることよりも、自己の良心のみがそれを証するような静かな抵抗の姿勢を貫くことであった。それゆえ、堀田が、被占領者が沈黙によって抵抗の意思表示を行う『海の沈黙』のプロットに強い関心を抱いたことは自然である。

ただし、占領者が被占領者の文化に憧憬を抱き、被占領者と対等な友情を持つとする『海の沈黙』の設定は、日本軍占領下の中国においてはやや非現実的であった。というのも、当時の日本の知識人の多くは、西洋文化に憧憬を抱く一方、同時代の中国文化を後進的として見下す傾向があったためだ（もつとも、ドイツについても、東ヨーロッパの占領地を舞台としたならば、『海の沈黙』のような作品は書かれ得なかったであろう）。さらに、当時の日本の知識人の多くは、他国の知識人と対等な立場で友情を育むような姿勢や経験を持っていなかった。

これらのことを意識したためか、堀田は『海の沈黙』のプロットを『時間』に持ち込む際に、大きな変更を加えている。まず桐野は、『海の沈黙』のドイツ人将校と違って、文化を通じた日中融和の理想について語らない。桐野が「同文同種」という言葉を持ち出す場面はあるが、それは虐殺事件の見え透いた弁明としてであり、英諦は内心においてこの言葉を「月並」な言い草として一蹴する。そもそも桐野は、「数十冊たまった英独文の中国研究書や中国古典の、どの一冊をも完読していない、マルクシズムや経済学の話もしはじめたが、これも完読しているものが少ない」（第二巻四〇〇―四〇一頁）と評される二流の知識人、「劣等優劣両様のコンプレックス」（第二巻三六〇頁）に囚われた卑小な俗物として描かれる。また、桐野が英諦に対して礼儀正しくふるまい得る理由は、書物を通じて覚えた英語を用いるためだと示唆されている。

以上をふまえると、敵国の将校の人物造型に関する限り、『時間』は『海の沈黙』のパロディとして読むことができ。もちろん、ここに、日本の知識人に対する堀田の痛烈な批判を読み取ることは困難ではない。

## 六 『夜の森』と『時間』

ところで、堀田は『時間』とほぼ同時期に、シベリア出兵を素材にした『夜の森』（講談社、一九五五年）という小説を執筆している。<sup>19</sup>『夜の森』は、小倉の呉服屋の手代である巢山忠三が応召し復員するまでのシベリアでの体験を、巢山の日記として描いた作品である。

堀田は創作ノート『夜の森 時間』の表紙の裏に、『時間』と『夜の森』は「表裏一体」の作品であると書いている。

われわれにとって革命と何か。これが「夜の森」「時間」の両者の根本主題である。「夜の森」は大正七、八年の日本軍のシベリア出兵、革命干渉戦争に取材し、「時間」——引用者注——は日華事変の際の南京暴行事件に取材し、小説というかたちにとらわれぬところで考えぬこうとしたものである。両者は相互に別々の作品であるが、作者はこれを表裏一体のものとして考えている。

それにしても、なぜ『時間』と『夜の森』は「表裏一体」の作品なのか。<sup>20</sup>考えられる理由として、シベリヤ出兵と首都南京の攻略を含む中国侵略の同型性、連続性が挙げられる。『夜の森』に描かれる日本軍による残虐行為とシベリヤのパルチザンによる抵抗は、『時間』に描かれる日本軍による残虐行為と中国人による抵抗に通じている。また、両作品はいずれも日本の海外侵略に巻き込まれた主人公による日記として描かれている。筆者の見るところ、堀田はい

ずれの作品においても、日本の海外侵略を客観的に捉え直すこと以上に、主人公が日本軍の海外侵略をどのように認識し、それにどのような態度をとるのかという点に大きな関心を向けている。

ただし、言うまでもなく、両作品には重要な差異もある。『時間』の主人公・語り手が中国人の知識人であるのに対して、『夜の森』のそれが下層階級の日本人だという点である。国籍、出身階層の違いは、乱世的状況をめぐる両者の認識や態度に少なからぬ差異をもたらしている。

とはいっても、巢山がシベリヤ出兵に対して無批判だということではない。巢山は、無学ながらも鋭い観察力・洞察力を持ち、日本の新聞報道やロシア革命に共鳴する花巻という通訳との交流により、次第に啓蒙されていく。巢山は、貧困家庭の出身である自身の境遇に照らし合わせながら、労働者や農民の反逆という点で米騒動とロシア革命が似た構造を持つことを認識し、下層階級が米騒動の鎮圧・弾圧に駆り出されていることを批判的に理解するようになる。詳しい分析は省略するが、巢山の日記は、シベリア出兵の記録として、小学校卒の商家の使用人によって書かれたとは思えないほど優れた内容になっている。

にもかかわらず、巢山は最終的には宿命論者になる。<sup>21</sup>

しかし、腹を立てたとて何になろう。こうしておられぬ気がするとゆうたところで我は軍人、内地へ帰って除隊したところで、村へ戻れば地主小作、呉服屋へ戻れば主人朋輩、抜きも差しもならぬ。こんなことを考えるのも、軍隊という旅に出ているような環境だけのこともかもしれぬ。(第二卷五三〇頁)



もつとも、巢山の日記が終始宿命論的なトーンで彩られているわけではないことをふまえるならば、右の独白は巢山の気持ちの揺れとして解釈すべきかもしれない。第三節で論じたように、『時間』の陳英諦も、ニヒリズムと希望の間で逡巡していた。とはいえ、陳英諦と比べて、巢山には、抵抗の姿勢を貫く覚悟や未来にコミットする姿勢は希薄である。

他方で、巢山は、米騒動とロシア革命を比較しながら、体制順応的な態度を日本人の特性であると考察している。

つまり、我が国では、米騒動のなどのように、窮民が騒ぐには騒いでもついいはおさまりがついてもとにかえるのだが、いつまでも荒れ放題でもとにかえらぬロシアとの比較が頭に浮ぶわけである。米暴動で暴れた内地の連中とて、いまも以前と同じように貧乏で、矢張り寒晒しだろう。とにかく日本という国には、貧乏人や寒晒しの我々などが如何に怒ってみても、その怒った顔を、氷が解けるように、いつのまにか、なにかは知らんが解いてしまうような仕掛が備わっておる。我々自身の方にも、何かしらん、ケロリとなるようなものが備わっておるようである（第二卷四六二頁、傍点堀田）。

なお、同様の見解は、堀田の他の著作においても繰り返し表明されている。たとえば、戦前から戦中および戦中から戦後にかけての日本の知識人の転向の問題を扱った『記念碑』（中央公論社、一九五五年）とその続編である『奇妙な青春』（中央公論社、一九五六年）では、あらゆる対立を「中和」し、状況への追隨を促す日本の思想風土が、登場人物によって批判的に考察される。

たとえば『記念碑』には、伊沢信彦が、「ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびで、ひさしくとどまる事なし。世中よのなかにある、人とすみなか栖すまと又かくのごとし——、なんて云われると、妙な具合だね、するするつとまきこまれてしまっんだよ、基本的に対立も何もなくなつちまうみたい、一見、見えてくるから不思議だよ」(第三卷一四二頁)などと述べた後、『方丈記』を朗読する場面がある。この伊沢の朗読を聞きながら、愛人の石射康子は、「不平や不満が歴史的な何物かに結びつき、結集されることによって力と智恵が生ずることを、官憲の弾圧だけではなくて、口惜しいことに民衆自体のなかにある何かが阻害し、解消してしまふ……」(第三卷、一四四頁)と思いを巡らす。

ちなみに、アジア・太平洋戦争開始以前の伊沢は、国策通信社の海外局次長として、「東京と欧米各地を往復転々とし」ていた。元来、伊沢はリベラルな人物であるが、一九四二年にアメリカ人の妻を残してアメリカから交換船で帰国した後は、軍部に迎合して各地で戦意昂揚の講演を行う。他方、戦争末期には、康子の義父である深田英人顧問官らと共に和平工作に関与するが、東京大空襲で負傷し途中で身を引く。戦後は、旧国策通信社を再編した通信社の重要なポストに就く一方、公職適否審査委員会の委員を務め、占領軍に対して迎合的な態度をとる。つまり、伊沢は「既成事実」に弱い典型的な宿命論者であるが、作中において、伊沢のメンタリティーは一貫して日本的なものとして位置づけられている。

これらの点をふまえるならば、先述の巢山の独白を一時的な気持ちの揺れと見なすことは妥当ではなからう。明らかに堀田は、巢山の宿命論への傾斜を日本人に支配的なメンタリティーとして位置づけている。そして、そのことを前提するならば、スパイとなり抵抗を貫く陳英諦の姿勢に日本的なメンタリティーのアンチテーゼを認めることは困

難ではなく、その点に、堀田が『時間』と『夜の森』を通じて考察しようとした「われわれにとって「革命」とは何であるか？」という問いに対する答えを見出すことができよう。

## 七 おわりに

本稿では、『時間』を、南京大虐殺に仮託して乱世的状況を描いた実験的な作品として読み直してきた。

単純化するならば、堀田は、日本軍の南京入城以後の乱世的状況を生きる中国人の処し方を、「役人」、「ニヒリスト」、「革命家」、「スパイ」に類型化して描いている。「役人」に該当する陳英昌は、官吏の立場を利用して乱世的状況を回避し我が身を守る。「ニヒリスト」に該当する伯父は、乱世的状況を積極的に利用して私利私欲を満たす。「革命家」に該当する刃物屋は、政治的党派に属し、日本軍に抵抗すべく勇敢に行動する。「スパイ」に該当する英諦とKは、国民政府のスパイとして人知れず孤独な抵抗を行う。

他方、乱世における身の処し方として、堀田は宿命論的な態度を批判的に捉える。『時間』において、その一つの典型は、状況を既成事実化しながら功利的に振る舞う伯父に見出すことができる。他方で、「末期の眼」をもって自然美に耽溺する逃避的な姿勢も宿命論の一形態として批判的に捉えられる。陳英諦は、これら二つのタイプの宿命論を退け、絶望のただ中においてなお希望を持ち続ける義務を自らに課す。

なお、先述した四つの人間類型に関係づけるならば、「役人」と「ニヒリスト」は宿命論者、「革命家」と「スパイ」は非宿命論者ということになるだろう。作中において、堀田は前二者を否定的に、後二者を肯定的に描いている。た

だし堀田は、状況に対してストレートに抵抗する「革命家」よりも、屈折、分裂をはらんだ「スパイ」により強く同一化している。その理由の一つは、堀田が「スパイ」の心理を乱世を特徴付ける普遍的な心理状態とみなすためである。本文中で論じたように、分裂をはらんだ「スパイ」の心理は、狭義のスパイに留まらず日本軍占領下における全ての中国人の心理に通じている。

もう一つの理由は、堀田が知識人を「スパイ」的な存在として捉えていたためだろう。前掲拙稿「ユダとしての知識人——堀田善衛『海鳴りの底から』論」において詳しく論じたように、堀田は体制に批判的な目を向けながら体制の内部（あるいは周辺）に留まる知識人を、ユダ的な存在として捉えていた。本書において、堀田が英諦とKを革命に挫折した、つまり転向した知識人として設定していることは偶然とは思われない。

『時間』には、英諦がKの家を訪れた時、Kの持つ美術史の本の中に、クールベ作のボードレールの肖像画に目をとめる印象的な場面がある。英諦は日記の中で、この肖像画について詳しく描写した後、深夜に無電機に向かう自分の姿を、一人机に向かうボードレールに重ね合わせる。

ありていに云えば、わたしは、深夜地下室で前のめりになって無電機に向っているわたし自身の姿勢を、あの絵の詩人の身体格好に認めたのだ。詩人は孜々<sup>しし</sup>として語を選び、練りきたえ、美を創造する。同じ姿勢で無電機に向い、わたしもまたそうであってはならぬという理由はなからう。

けれども詩人は、あのように真剣な眼つきのまま、その肉体を、楊と同じく黴毒にむしばまれてゆき、わたしは、わたし自身の救いのために、祈りをこめて電鍵<sup>キイ</sup>を叩き、いつかは発見されて、拷問されて、もういちど殺さ

れるだろう……（第二巻三九六頁）。

深夜の地下室において、人知れず電鍵を叩き、日記を綴る英諦の姿——。堀田にとって、おそらくそれは乱世を生きる知識人の原イメージなのであろう。

\*本稿では、神奈川近代文学館堀田善衛文庫に所蔵されている未公開資料を紹介・引用させていただきました。資料の公開をご快諾いただきました堀田善衛氏の著作権継承者である堀田百合子様のご厚意に深く感謝いたします。また、資料の閲覧および公開について、神奈川近代文学館の職員の皆様に変にお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

- (1) 『堀田善衛全集』（第二期）第二巻、筑摩書房、一九九三年所収。初出は、「時間」『世界』一九五三年一月号、「詩篇」『文学界』一九五四年二月号、「山川草木」『改造』一九五四年七月号、「受難楽」『文学界』一九五四年八月号、「存在と行為」『世界』一九五四年一〇月号、「帰還」『世界』一九五五年一月号。本稿における堀田の著作からの引用は、原則として『堀田善衛全集』（第二期）全一六巻、筑摩書房、一九九三―一九九四年に依拠する。引用を行う際は、本文中に巻数、頁数を記載する。
- (2) 彦坂諦『文学をとおして戦争と人間を考える』れんが書房新社、二〇一四年、神子島健「思想的事件としての南京事件」『世界』二〇一七年一二月号も、この点に注目している。他方で、竹内栄美子は、英諦が被害者であると同時に加害者でもあり、かつそのことに自覚的であることを指摘している。「Takeuchi Emiko, "Overlap between Victims and Perpetrators in Hotta Yoshie's Novel *Jikan*," 『世界の日本研究』 国際日本文化研究センター、二〇一五年。
- (3) 堀田善衛『時間』、岩波書店、二〇一五年、二七―二頁。

- (4) 『上海にて』 筑摩書房、一九五九年。引用箇所の出出は、『季刊・現代芸術』第三卷、みずす書房、一九五九年。
- (5) 「堀田善衛『広場の孤独』論——二〇世紀における政治と知識人」層——映像と表現』第九号、二〇一六年一〇月、「ユダとしての知識人——堀田善衛『海鳴りの底から』論」北海道大学文学研究科紀要』第一四八号、二〇一六年三月、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(1)——西行」同、第一五〇号、二〇一六年一月、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(2)——鴨長明・藤原定家」同、第一五一号、二〇一七年二月、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(3)——ゴヤ」同、第一五二号、二〇一七年七月、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(4)——モンテーニュ」同、第一五三号、二〇一七年一月。
- (6) 『堀田善衛全集(第二期)』第一三卷所収。一九五三年春に新日本文学会で行われた講演。
- (7) 神奈川近代文学館所蔵。
- (8) 『カミユを読む——評伝と全作品』大修館書店、二〇一六年、二二七頁。
- (9) 『ベスト』宮崎峰雄訳、新潮社、一九六九年、四頁。
- (10) たとえば英論は、蒋介石夫妻が南京を脱出したとする噂を耳にした際の心境を、「特権の座に、堂々と、何の疑いもなく坐り込み、そこから百千の命令を下し、危険が迫ればさっと引揚げる。それは当然でもあろう。特権というものは、なんと勇ましく、かつ感動的なものなのだろう。それに比べて、生命となげなしの財産を守ろうとして右往左往している難民たちは、何と、ただ単に悲惨であることか!」(第二卷二八八頁)と綴っている。
- (11) 『堀田善衛全集(第二期)』第一四卷所収。初出は、『新潮』一九五三年二月号。
- (12) 『堀田善衛全集(第二期)』第一四卷所収。初出は、『思想』一九五四年六月号。
- (13) 『時間』には、「戦争は宿命論的な感情をもっとも深く満足させる」(第二卷三二七頁)という一節もある。戦争と宿命論の関係については、アラン『裁かれた戦争』(原題 *Mars ou la guerre jugée*) から示唆を得たことが推測される(同書には、「決定論」と題する章がある)。神奈川近代文学館所蔵の『創作ノート(四)』には、「Alain "Mars ou la guerre jugée" というメモが見られる。
- (14) 括弧内の日本語訳は引用者による。
- (15) 陳童君が「堀田善衛『時間』と南京大虐殺事件」『日本近代文学』第九六号、二〇一七年五月で指摘しているように、堀田は創作ノート『夜の森 時間』の中で、ガエタン・ピコン『現代フランス文学の展望』(フランス語版)より、マルローについて論じた箇所をノ

堀田善衛『時間』

- ト四頁分抜粋している。『時間』には、「人間の存在を意識するとは、結局、その条件がいかに受け容れ難いものであるかということを知ることではないか」（第二卷三七二頁）という記述があるが、これは、『現代フランス文学の展望』の中の一節、「Prendre conscience pour l'homme, c'est découvrir combien sa condition est inacceptable」の引用に近い（創作ノートでは、この部分に赤鉛筆で下線が引かれている）。なお、同書において、ピコンは、マルローが同時代の歴史的事件を素材としつつ虚無と不条理の中で、「冒険」を行う人物を好んで描いたこと、絶望的な行動の中に人間の自由と偉大さを見出そうとしたことを指摘している。ピコンによれば、マルローにとって重要なのは行動そのものであり、結果ではない（行為の社会的な反響は行動自体の偉大さほどには考慮されず、本質的なことは、人間が自らのうちにもつ能力を見出して、人間を救うことなのである）。「現代フランス文学の展望 白井浩司訳、三笠書房、一九五四年、六一頁、傍点原文など）。ピコンは、「スペインの共和派の敗北の書が『希望』と題されているのは意味深い」（同、五九頁）とも指摘しているが、このことはニヒリズムと希望を表裏一体のものともみなす英論の思想（「つまり、決定的な救いの日などがありえないということ、そのこと自体がわれわれに希望を生み出させる」（第二卷三七三頁）など）にも通じていよう。なお、創作ノート『夜の森 時間』には、マルロー『希望』（フランス語版）から、ノート一四頁分の抜粋がなされている。
- (16) 『金石範作品集』Ⅰ、平凡社、二〇〇五年所収。
- (17) 「近代とは何か（日本と中国の場合）」『竹内好全集』第四卷、筑摩書房、一九八〇年、一五八頁。
- (18) 創作ノート『夜の森 時間』には、「この項は、もっぱら中尉の話——*Silence de la Mer*」と、こう記述がある（『海の沈黙』の原題は、*Le Silence de la mer*である）。なお、『海の沈黙』の日本語訳は、一九五一年に岩波書店より出版された『海の沈黙・星への歩み』（訳者は、河野典一・加藤周一）に収録されている。
- (19) 『堀田善衛全集（第二期）』第二卷所収。初出は、『夜の森』『群像』一九五四年一月号、「雪どけ」同、一九五四年二月号、「凱旋」同、一九五五年二月号。
- (20) 『堀田善衛全集（第一期）』第三卷（筑摩書房、一九七四年）の解説である菊池昌典「歴史的現実とモノローグの世界」は、同巻に収録された『時間』と『夜の森』をセットで論じている。菊池は両作品の共通点を、シベリヤ出兵と南京事件を等しく「侵略」として捉えていること、モノローグの形式で書かれていること、「戦争ならざる戦争の状況下で、懊悩する人物像を核にしている」ことなどに見出ししている。

(21) 創作ノート『夜の森 時間』には、「自分は呉服ゴキョウヤの手代にもどる。海へ沈む。そのどこがわるいか―。別段変りはしない。いくらか人間が出来たくらいのものだ。『発展』がない」、「われわれ庶民とはこういうものだ。ある考え思想を先に立てて動くということはない。考えはすべて後から来て、どこかへ沈んでゆく」というメモがある。

(22) 『堀田善衛全集(第二期)』第三卷所収。初出は、それぞれ、『中央公論』一九五五年五月号から八月号まで、同、一九五六年一月号から四月号まで。

(23) 『記念碑』と『奇妙な青春』では、共産主義者の安原初江が、伊沢に代表される日本的なメンタリティーのアンチテーゼとして位置づけられている。